

【聖書】

ルカ福音書^{16:14} 金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。¹⁵ そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。」

¹⁶ 律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。¹⁷ しかし、律法の文字の一面がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい。¹⁸ 妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」

1 聖書は現実を描く

皆さんの聖書のイメージはどんなものでしょうか。教会に通った事がない人たちの中には、「聖書に書いてある事は神の教えかもしれないけれど、それは『タテマエ』的なもので、私達の現実とはずいぶん違う」と思う人もいるでしょうし、私達もそう思ってしまう事があるかもしれません。しかし、そうではないことは聖書を読めば、すぐに判ります。赤裸々な人間の姿が描かれている事に気づきます。例えば、イスラエル史上最も栄華を極めたというソロモン王もそうです。彼がダビデ大王の跡を継いで即位した頃、神は、「何事でも願うがよい。あなたに与えよう。」と言われます。すると、ソロモンは、「あなたが私に委ねられた多くの民を正しくさばき、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。」と民を治める知恵と分別を願い出ました。神は、長寿や富、戦いに勝つ事を求めず、知恵を求めたソロモンを高く評価されました。そして知恵を与えるだけでなく、彼が求めなかった富と栄光もお与えになりソロモン王は栄華を極めました。しかし、やがてソロモン王は、外国人の妻を迎えて、外国の神々を拝むようになりました。また、自分達の桁外れに贅沢な生活の為に、国民に重い負担を強いるようになります。ソロモンが力と富に魅入られ変わっていく様子を、聖書は淡々と描きます。このソロモンの圧政が息子のレハブアムの代に王国が南北に分裂する原因となるのです。富や権力の誘惑に勝ち神の御心に留まって生きる事は、知恵溢れるソロモンをしても難しい、人間のリアルな姿が聖書には描かれています。

2 金に執着するファリサイ派

今日の聖書箇所にもそのように変わっていった人々が出て来ます。「金に執着するファリサイ派の人々」です。そもそもファリサイ派は、信仰熱心な人々

の集まり、自分たちの南ユダ王国が異教のローマ帝国の植民地になっても、信仰を捨てず、自分達の信じる神の律法を徹底的に守ろうとした人々です。積極的にローマの手先となり、財産をつくった徴税人達とはわけが違います。富よりも律法を守る事を優先してきたファリサイ派の人々は、高潔だけど貧乏な人が多かったと言われています。しかし、彼らは変わっていったのでしょうか。「ファリサイ派の人達は、神に忠実に仕える素晴らしい人々だ」と社会がほめそやし尊ばれるようになり、それなりの社会的地位につき、お金を得る機会も増えていく、そうになってしまうと、多くのファリサイ人が名誉とお金を手放す事ができなくなった、お金に執着するようになったのです。ソロモンやファリサイ人達だけでなく、キリスト教の歴史の中でも同じような事が繰り返し起こっている事を皆さんもご存じかと思います。私達人間は、富と栄誉、権力の誘惑に非常に弱い者達、一度手にした既得権は手放したくない者達です。

3 神になろうとする人間達

そんなファリサイ人達が主イエスをあざ笑います。14節の「あざ笑う」と訳されているギリシャ語は、「鼻に皺を寄せる」という意味があり、相手を馬鹿にして嘲る事。主イエスが弟子達に「**あなた方は神と富に仕えることはできない**」と教え諭しているのを聞いて、彼らはせせら笑ったのです。「ふん、何と馬鹿な事を。我々は律法を守って神に仕えているし、富や名誉も得ている。愚か者で青臭いイエスめ。」と思ったのでしょうか。

ファリサイ人は律法を熱心に守る事によって、自分達は正しい人間であり救われるべき人間だと自分達でも思い、周りにもそうアピールしていました。けれども、人が正しいか正しくないか、救われるか救われないかを判断できる、つまり真実に人間を裁く事ができるのは神お一人だけです。人間は、自分自身も他者も裁いたりはできません。

しかし、彼らはそれができると勘違いします。ここに、ファリサイ人達が、信仰深そうに見えてその実、神を神として仕える事をせず、自分達を神としていた事が現れています。そんなファリサイ派に対して、主イエスが与えた一撃は痛烈、遠慮のかけらもありません。15節。「**あなた達は人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなた達の心をご存じである。人に尊ばれることは、神には忌み嫌われる。**」主イエスは度々、人の心に鋭く切り込むような言い方をされますが、彼らの心の中に、自分達を神とする傲慢な思いがあるのを見抜いての事。ルカ福音書の初めの方のマリア賛歌で歌われる「**おごり高ぶる者を打ち砕く神**」(1:50)のお姿が主イエスの中にはっきりと描かれています。

4 律法と預言者の時

主イエスはそのファリサイ派に次のように語られます。16節「**律法と預言者はヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされている。**」

神は、律法と預言者を通じて、やがて神の救い主メシアがこの地上に現れ、神の支配を打ち立てる事を預言されました。洗礼者ヨハネが最後の預言者であり、彼も「自分のすぐ後に救い主メシアがやって来られる」と預言しました。その預言通り、神の子イエスが現れ、待ちに待った神の正しく力強いご支配がこの地上にやって来た事が告げ知らされます。律法と預言者を通じて約束された事がまさに成就したのです。

続いて「それ以来、誰でも力づくでそこに入ろうとしている」と言われました。「力づくで」とは、「神の国の福音」とは似つかわしくない暴力的なイメージ、まるで神の支配に入れるのであれば、腕力を振るう事も辞さない、無理やりにでも神の国の門をこじあけて中に入りたい、そういう勢いを感じます。ここは解釈が難しい所と言われており、「解釈者の十字架」とさえ呼ばれているそうです。なんだかおかしい呼び方ですが、十字架ほどに解釈者を苦しめてきたようで、実際、様々に解釈されてきました。その中で、ある神学者が、「この乱暴な表現は、ファリサイ人達が抱いていた徴税人や罪人達に対するイメージを表しているのではないか？」と説いていました。私もそうではないかと思います。「洗礼者ヨハネの時以来、誰でも力づくでそこに入ろうとしている」というのは、ヨハネの後にやって来た主イエスのもとに救いを求め我も我もと押し寄せて来る罪人や徴税人達、信仰深いとは思われていなかった粗野で貧しい人々の姿を表しているようです。彼らはファリサイ人達のように自分が人にどう見られるか、等と気にする余裕はありません、必死に、神に救われる事を求め主イエスのもとに押し寄せて来ました。そういうなりふり構わない勢いを感じる言葉です。

5 突入してきた神の愛

しかれども！先に「力づくで入った」一なりふり構わずやって来たのは、人間ではありません。天の御神です。人間の罪を決して他人事にされない天の御神は、人間の滅びに向かう歴史に突入し、これを克服し神の支配をこの地上にもたらそうとやって来られました。その為、神はご自身の最愛の独り子であるイエス様を此の世に人間として宿らせ、全ての人の罪を背負わせて十字架に架けたのです。主イエスも父なる神のみ旨に従い通し、神に見捨てられた者として絶望に苦しみ、絶対的な孤独にうめき声をあげました。罪なき神の御子は、私達罪人の罪の故に、全ての人が忌み嫌う十字架につかれた。人間は自分達の罪を自分達で贖う事はできず、神の御子が完全なる人間となって贖うしかないからです。天の御神が私達の滅びの歴史に突入してこられた、神の愛が天地の隔てを突き抜け押し寄せて来て、神の国、神の支配がこの地上に始まりました。

6 神の支配のリアリティ

だからこそ、イエス・キリストと共にやって来た神のご支配は、決してきれいごとですまされる表面的な支配ではありません。主イエス・キリストは、今まさに自分を絶望の十字架に釘打っている敵について「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは自分達は何をしているのか分からないのです。」と祈り、その赦しを執成す程の愛を持って私達の罪の現実に入力してこられたからです。私達の罪を私達以上に知っておられ、そして尚も私達以上に私達を愛してくださっている、それが主イエス・キリストというお方です。

しかし、ファリサイ人達、この世で自己満足し神を求めている人々にはそれが分かりません。14節の「あざ笑う」という言葉は、主イエスの十字架の場面でも出て来ます。「民衆は立って見つめていた。議員達もあざ笑って言った。『他人を救ったのだ。もおし神からのメシアで選ばれた者なら、自分を救うがよい』」(23:35)の『あざ笑って』です。なんという事かと思えます。ですが、主イエスの十字架はこの議員達の為でもありました。ご自身をあざ笑うファリサイ人達の為でもありました。神は三日目に、この主イエスを永遠の命に甦らせ、これほどまでに深い人間の罪が主の十字架によって赦され、永遠の命への道が開かれた事を宣言されるのです。ルカによる福音書ではそれはまだ先の事ですが、そこに向かって物語は進んでいきます。

7 律法はなくなる

主は仰います。「律法の文字の一画がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい。」これはどういう事でしょうか？神の国の福音と律法との関係はどのようなものでしょうか？かつて、律法は神の国に入るための条件として考えられていました。しかし、主イエスが現れ神の国の福音が告げ知らされてから、律法が救いの条件ではない事が明らかになりました。何の功績もない者を救うのが神の国の福音です。しかし、神の国、神の支配は無秩序ではあり得ません。イエス・キリストの十字架と復活の福音、良き知らせと出会いこれを受け入れ、神の支配のもとに入れられた時、そこに生きる者として与えられる規範、法律があります。神の国の法律が律法だと主は仰っているのです。神の国は永遠なるものですから、律法もほんの些細な部分であってもなくなる事はない…と主は仰います。神の支配がこの地上にやってきている事の確かさは、十字架と復活の主イエス・キリストの福音にあるのですが、この福音が同時に神の国の法律、律法の根拠でもあります。

8 姦通の罪

主は神の国の法律の一例として、再婚を目的とした離婚の禁止を挙げています。当時のファリサイ派の人々は、モーセの律法を拡大解釈し離婚後の再婚を許可していました。彼ら自身の内に、そのような思いがあったからでしょう。主イエスは「あなた達は、自分達の欲望によって神の国の法律を変えてい

る」と仰っています。結婚は神が定めた神聖なもの。その神聖な結婚よりも自分の欲情に引きずられて、パートナーをとり変えようとするのは神の支配のもとに生きている人間のあり方なのか？自分のパートナーを神が自分に与えてくださったかけがえのない人と受け入れ、協力し合い人生を共に歩んで行く者とは考えられないのか？ただ自分の欲情を満たす対象として見て、別の対象が現れたら取り換えようとするのは、神の国に生きる者のあり方ではない…と主は仰っています。主イエスは、富と共に欲情を取りあげ私達がそれらの誘惑にいかに弱い存在かを実例を挙げて述べておられるのです。

9 使命を与えられる神

しかし、そんな弱く愚かな私達の事を天の父なる御神は十分にご存じです。神は全てをお見通しの方ですから、神以上の現実主義者はいません。しかし、なんとも不思議な事ですが、神は誘惑に弱く勘違いするような愚かさを持つ私達をこそ用いて、この地上に神の国を現わそうとされています。神がその気になれば、神の国をこの地上に打ち立てる事など一瞬にして可能なのに、神は決してお一人ではそれをなさろうとはされません。弱くて愚かで罪深い私達に、神の御子イエス・キリストの霊を与えて、神の国をこの地上に広げて行こうとされるのです。その為に私達一人一人にはなすべき事、使命が与えられます。それが、神の国の福音に生きる者の現実です。

ファリサイ派は、「この地上に神の国を広げていく」という神の目的を見忘れました。彼らは、自分達が正しいとされる事、救われる事を目的としてしまった。自己目的化してしまった信仰は、容易に神を見失い、自分達が神となってしまう事を私達は忘れてはならないと思います。神の目的はなんであるか？その事を忘れる事なく、その為に自分にどのような使命が与えられているかを常に考えていく事がとても重要なのだと思います。

とはいえ、この地上に生きて自分の肉体的欲望をもてあまさない人などいません、自分達の欲望に引きずられ、神の目的や与えられた使命を求める事を忘れてしまう事も多いでしょう。神からの使命を果たすにはあまりにも弱い私達です。そんな自分を「惨めだなあ」と悲しむ時、落ち込む時、もう立ち上がれないと思う時、そんな時こそ、神が与えて下さった神の御子の霊と出会う時です。弱く愚かで神の愛に応えるには不十分な自分を知り、しかし、その自分の為に呻きをあげてまで父なる神に執成してくださる御子の霊が、今、この私の内に与えられているという現実と出会う時です。「私には神から与えられた使命を果たす事はできない、しかし、私の内にいてくださるイエスは出来る」と気づく時。私達の内々に与えられている神の子の霊、見えないイエス・キリストに依り頼んで神を愛し、神が与えて下さる使命に生きようとする時、そこに、自分達の信仰の支配ではない、まことの神の支配、神の国が広がっていくのだと思います。そうして、私達はより一層より深くキリストと出会いキリストを知り、魂にキリスト・イエスを刻み込まれて私達は変えられる、一滴一滴の雫が岩を

穿ち形を変えるように、少しずつ少しずつキリストの妹や弟へと一生をかけて造り変えられていくのだと思います。自分が思い描く事など到底できない者へと変えられていくのですから、現在の自分を誇る必要も正当化する必要も、美化する必要もない、肩の力が抜けたありのままで祝福された喜びある旅路ではないかと思います。

10 ミホコさん

最後にそんな生き方をしてきたある女性の話を紹介したいと思います。このミホコさんは非常にパワフルな方で一家の主婦であり、幼稚園の教諭や園長として幼児教育に取り組み、教会では牧師夫人としての役割だけでなく、奏楽者やCS教師の奉仕も行い、更には命の電話の奉仕など、いくつもの働きを長い間精力的にこなして来られたそうです。それも、義務感からやっているのではなく、これが自分に与えられた使命であり、好きだからやっているという感じだったそうです。高齢になったミホコさんは認知症となり、人の顔も名前も覚えられなくなってきたので養護施設に入所し、同じ系列の施設で働くお孫さんが、度々ミホコさんに会いに行かれるようになりました。以下はそのお孫さんの文章からの引用です。

先日、『おばあちゃんは幼稚園で働いていたときは忙しかったでしょう？』と話しかけたら『私働いていたかしら・・・』と返ってきた。私は、ついに仕事のことも忘れてしまったんだ、と悲しくなった。……(省略)……『だってすごい仕事がんばってたって聞いたよ、鉄人ミホコだったんだよ』と話すと、『そうだとしたらそれだけ健康だったってことね。』と嬉しそうに言った。今までの人生で成し遂げてきたこと。それを忘れてしまうなんて切ないじゃないかと思ったけど、彼女にとってはそうでもないらしい。」「ミホコの圧倒的な安定感の根拠は、神様への信頼だ。与えられた健康を使って、与えられた使命のために尽力する。私にはどんな使命が与えられているのか、まだわからないけれど、ミホコのように後から振り返ってわかるというものなのかもしれないと思う。今自分に与えられた条件で、できることをやる。自分の計画を超えたところで、どんな計画が動いているんだろう。残りの人生も楽しみである」。ミホコさんは、2017年に天に召されました。

この話を聞いて私は思いました。ミホコさんにとって大切だったのは、自分が何を成し遂げたではなかった。何よりも大切にしていたのは、神が自分を愛し使命を与えて生かしてくださるというゆるぎない現実、神の国の福音の現実であったのではないか。そこに根を張って生きたミホコさん。神を見上げ神に生きた、自分の仕事を覚えておく必要などないまでに生き切った、ファリサイ派のように自分を義とし人に見せびらかす必要などない程に生き切り、全てを与えて下さった神に全てをお返しした。これこそ、神の国の福音に生きた者の現実の姿だ！…と私は静かな感動を覚えました。

横浜ナザレン教会に連なるお一人お一人もまた、主イエス・キリストと共に明らかにされた神の愛の内に大きく根を張り、神のご支配のもと、与えられた使命に生きる、福音の現実生きるという幸いな歩みを重ねる事ができますように…と切に祈っています。